

2.3 デザインアプローチによる統計的予測に対応する調査研究

坂下仁志*、高野あや*

1. 目的

色々な企業・団体・行政機構等が、様々な調査を行い、その結果は各種の図表等で表現されて雑誌・書籍等に掲載・発行されている。

そこで、本研究ではこれらのデータを多く集めて、データのデータベース化と検索処理を行うことによって、個々の調査では得られないが、——例えば同様の調査が複数の機関によって同時期になされていたとすれば、それらの調査の重要度は高いと見る等——多数データを得ることによって初めて明らかとなる、データの鳥瞰図的なものを得ようとする試みであり、そこから得られる傾向・結果を、今後のデザイン開発の企画に活かすことを目的とする。

2. 方法

2.1 できるだけ多くの出所から、できる限り多くのデータを、ランダムに集める。

2.2 収集したデータをどの様に加工処理するかを検討し、フォーマットを決める。

2.3 フォーマットに従って、処理をする。

2.4 処理結果を分析する。

2.5 分析結果から、今後の指針を得る。

3. 結果

3.1 これまでに、政府刊行物、各種雑誌・新聞類から素材データとして約600件収集した。

3.2 処理の方法を、色々な角度から検討した結果、以下に示す理由から取り上げる項目は、次の7項目とした。

①調査機関（企業・団体・行政機構等）

②調査年月日

③調査対象

④調査場所

⑤調査サンプル数

⑥調査結果（データ内容）

⑦調査データにつけられたヘッドコピー等

①から⑥の項目については、誰が・どのような目的で・誰を対象に・何処で・どのくらいの規模で調査したかの必須項目と言えるもので、いずれのデータにも共通的に記載されていることから、データベース項目とした。

⑦については、集まったデータを眺めていると、商品広告等と同様にヘッドコピー等が付与されている例が多く、目を引いたこと、1テーマ・3データの調査結果等では、3つに各々サブ的なヘッドコピー等が付けられている例も多々あったことに加え、調査機関がその結果をどう見ているかの反映でもあることから項目として採用した。また、以後の処理方法として、パソコン利用のデータベース機能の中で複合検索し、KJ法に準拠して整理・マッピングすることとし、入力には①から⑦に加えて、より多角的で容易な複合検索が可能ないように、大分類・中分類・小分類の独自項目を設定した。（表-1参照）

フォーマット決定後作業を進めたが、全データの入力まで至っていないことから、分析および指針を導く作業は次年度に報告する。

*デザイン研究室

表-1 データ入力の様式

デザイン統計データ

No	D 調査機関	調査年月日
対 象	どこで、誰を対象とした調査か	サンプル数
H D 名	調査結果につけられた大表題	
D 大名	〃 中 〃	
D 中名	〃 小 〃	
D 小名	データそのものの名称	
大分類	中分類	小分類
内容 1	} データ内容	
内容 2		
内容 3		
内容 4		
内容 5		
内容 6		
内容 7		